富山県現代俳句協会会報

第61号

令和5年12月1日発行

富山県現代俳句協会
発行人　森野　稔
編集人　河合　彰
事務局　森川敬三
〒九三九―八二四一　富山市惣在寺一三〇八
TEL　〇九〇―一三六七―〇五一八

吟行の心構え

富山県現代俳句協会会長　森野　稔

猛威を振るった新型コロナ禍もようやく落ち着き、各地で吟行会などが行われるようになってきました。そんなときにどんな心構えが必要なのでしょうか。皆さんの中には、その吟行地についてあらかじめ調べてから吟行に臨む方もおられるでしょう。また極端に言えば、あらかじめ事前調査に基づいて何句か俳句を作って、当日はそれを確かめるだけという方もいらっしゃることでしょう。私は自分の結社の吟行会には必ずと言っていいほど皆さんに話すことがあります。「吟行地を詠むのではなく吟行地で詠むということを心がけて欲しい」ということです。この「を」と「で」の違いは大きなものがあります。吟行地を詠んだものは観光俳句になってしまいます。まして固有名詞を織り込んだら限りなくマンネリの句になってしまいます。吟行地を詠めば、その俳句は季節や天候によって多少の差異はあるもののすでに誰かが詠んだ句と似たようなものになります。「吟行地で詠む」となれば、一人一人の体験や考え方がみな違うように、俳句は無数にできることになります。目の前の風景をいったん自分の胸の中に取り込み、そこから生まれて来る衝動などを詠めばいいのです。先日、黒部市生地の清水の湧き出る場所に吟行に出かけた時にある人が〈清水にて間引菜の泥洗いたし〉と詠まれました。きっと作者は吟行前に間引菜の泥を洗い流すのに苦労されたのでしょう。己の体験を目前の景色の中に落とし込まれました。俳句はそれでいいのです。無駄に力む必要は、これっぽっちもありません。

富山県現代俳句協会創立三十周年　記念式典・全句講評秋季俳句大会

令和五年九月二十三日（土）、ボルファートとやまで、本協会創立三十周年の記念式典と全句講評吟行俳句大会を行った。式典では、協会の発展に尽くした三名を表彰した。その後の俳句大会では、中村和弘現代俳句協会会長から多くの句について講評をいただいた。

吟行は富山環水公園周辺に於いて行い、参加者は三十四名で六十六句の投句数となった。投句締切後昼食をはさみ、創立三十周年記念式典を行った。

式典は二口わこう副会長の開会宣言に始まり、森野稔会長が式辞を述べ、中村和弘会長を紹介した。次に中村和弘会長の祝辞とともに、現代俳句協会の法人化や今後の現代俳句の方向性について述べられた。その後、功労者、白井重之氏・坂田直彦氏・川上弥生氏（欠席）への表彰状をお渡しして式典を終了する。秋季俳句大会は選句に始まり、披講、点盛りと進む。その後中村和弘会長が講評され、終りに入選句を発表された。休息の後、秋季俳句大会の成績発表をし、天位から入選までの表彰を行った。最後に中村和弘会長を囲み、功労者、入賞者、出席者との記念写真を撮り大会は盛況裡に終了した。

創立三十周年記念秋季吟行俳句大会

入賞・入選作品

【入賞】

天位　秋思一つ流すに広き運河かな　富山市　河岸　佳子

地位　どの影もみな受け入れて秋運河　黒部市　八尾とおる

人位　爽やかや金婚夫婦のテラス席　富山市　高島　詩香

【入選】

喧騒を鎮めて運河水澄めり　河岸　佳子

秋の雲池の田螺の独り言　河合　彰

航跡の半円消える水の秋　高木　昭夫

波立つは運河秋思の木のベンチ　櫻打　伸子

閘門へ向かう舳先へ小鳥来る　細野　千里

水湛え水を廻らし秋の風　森川　敬三

秋雲の透けてスタバのガラス張り　高木　昭夫

老いの徒歩はげますように秋海棠　跡治　順子

空襲の歴史を沈め水の秋　森野　稔

告白は糸電話なり小鳥来る　高島　詩香

茶店へ列脇をすーっとギンヤンマ　坂田　直彦

戦さ今も運河の秋の匂い立つ　櫻打　伸子

玻璃籠めの茶房素風のただなかに　幹　自聲

秋蛙飛んでたちまち水となる　森川　敬三

出航待つ軽鴨の子の列目で追って　坂田　紀枝

船出れば雨と風呼ぶ秋彼岸　垣内　和代

運河を下る約束の日の赤とんぼ　坂田　直彦

秋彼岸フェリー乗場の吹流し　幹　自聲

雨あがる一気呵成に秋残し　飛世　峰子

現代俳句協会会長　中村和弘　選

特選　秋渇き芥のみこむ鯉の口　富山市　古澤　桃

秀逸　喧騒を鎮めて運河水澄めり　富山市　河岸　佳子

同　航行の舳先をよぎる渡り鳥　氷見市　細野　千里

同　告白は糸電話なり小鳥来る　富山市　高島　詩香

秋季吟行俳句大会入賞者

人位　高島　詩香さん

地位　八尾とおるさん

講師　中村　和弘氏

天位　河岸　佳子さん

中村和弘氏選　入賞者

秀逸　高島　詩香さん

秀逸　細野　千里さん

選者　中村　和弘氏

特選　古澤　桃　さん

秀逸　河岸　佳子さん

作者の思い

○天位　秋思一つ流すに広き運河かな　河岸　佳子

悠々と水を湛える富岩運河と環水公園。

街中の喧騒と世の中の混濁をもシャットアウトしたかに思える静寂な空間は、憩いの場としては最高です。

ゆるやかに流れる水を見ていて、不意に齢のせいか、はたまた秋風のいたずらか、訳もなくもの思うことが一つ二つと浮かびます。水辺に佇むも思いを流すには運河のあまりの広さに気遅れてしまう心持を詠みました。

四季を問わず、スタバからの運河や天門橋からの眺望、またクルーズ船に身をゆだねた心地良き時間と景観も楽しみの一つです。

○地位　どの影もみな受け入れて秋運河　八尾とおる

「晴れ男」と言われてきた私であるが、目まぐるしい天候の変化に遭遇した。夜明けからの土砂降りで電車は遅延である。電鉄富山駅に着くと、卒寿を超えた齢を忘れ、吟行地富岩運河へ急いだ。

途中、秋雨から晩秋を思わせる秋時雨となり曇り空へと変わった。やがて目の前に現れた公園のシンボル、天門橋と運河の景観がたちまち私の目と心をとらえた。句心を呼んだのは次の瞬間であり、天門橋の大きな影と、様々な影に吟行の一句が完成したのである。

因みに、配布された協会三十周年記念の歩みのトピックス欄に私の天位句六句が記載された。皆様との尊い句縁に感謝の一日であった。

○人位　爽やかや金婚夫婦のテラス席

高島　詩香

吟行地の富岩運河環水公園は人々の憩いの地となっており、多くの観光客も訪れています。中でも何年か前に「世界一美しいスタバ」に選ばれた喫茶店は人気があります。秋日、お年を召したご夫婦がテラス席で静かに珈琲を飲んでいらっしゃる姿に触れました。金婚位のご夫婦でしょうか。おそらく幾多の苦労、出来事を乗り越えてきたであろうお二人を見ていると神々しく思えたものです。また、時折浮かべる微笑みからは、爽やかさも感じました。

夫婦に限らず、人との出会いは奇跡だと聞いたことがあります。その奇跡の後に紡いできた時間が絆になるのでしょうか。今からでも遅くない、出会えた人たちとの繋がりを大切にしたいと思いました。

富山県現代俳句協会功労者表彰式

白井重之 氏

中村和弘
現代俳句協会会長

坂田直彦 氏

中村和弘現代俳句協会会長を囲んで

事務局便り

Ⅰ　富山県現代俳句協会　定期総会
及び春季俳句大会

一　日　時　令和六年三月三十一日（日）
受付開始　十二時三〇分　開会十三時

二　会　場　富山県教育文化会館二階集会室
富山県富山市舟橋北町七―一
電話　〇七六―四四一―八六三五

三　県協会年度会費納入　二千円
（会場受付時にお納めください）

四　総会議事終了後　春季俳句大会を催します。
（終了予定十六時）

五　俳句大会の投句要領及び事前投句用紙は、会報に同封いたしました。

Ⅱ　第四回富山県現代俳句協会賞作品募集

一　締　切　二〇二三年十二月十五日必着

二　賞の発表及び表彰
二〇二四年三月三十一日（日）
定期総会にて

三　募集要項は会報に同封

Ⅲ　自然災害被災に伴う会費免除

（一社）現代俳句協会会員の方には、東京本部より次の通知が来ています。

一　令和五年一月～十二月の間に発生した自然災害に起因する損害に対して、令和六年度の会費を免除する。

二　所定の申請書が提出されれば、審査する。
（詳しくは富山県事務局に照会）

Ⅳ　現代俳句協会入会者募集

富山県及び（一社）現代俳句協会に入会していただける方をご紹介ください。

結社便り

「海原」

◇海原富山支部は通信句会を実施、継続中

「寒潮」

◇現代俳句誌　寒潮　三二七号～三二九号　発行

◇令和五年度　寒潮総会・俳句大会

日時　十一月九日（木）　場所　呉羽ハイツ

天位　臥す母に少し開けをく月の窓　平譯　宏修

地位　鬼灯を鳴らせば駆けてくる昭和　青木　章子

人位　秋の暮我が法名を引き出しへ　石野　景子

入選　満月や世界の果ての夢ひろふ　佐藤　美子

影を踏み踏まれ鎮守の盆踊　二口わこう

精進を重ねて卒寿水引草　日合　英子

想い出をさまよいながら山眠る　柄沢　恭子

芋の露気ままな風と遊びおり　野坂千賀子

かく生きて飯食う二百十日かな　小谷　伝雄

「喜見城」

◇俳誌「喜見城」八八二号～八八七号発行

◇令和五年度同人会　六月十八日（日）新川文化ホールにて十七名が参加者して開催

一位　赤すぎて椿おもたくなりしかな　石田　英子

一位　草引きを楽しといひし母卒寿　宮﨑あつ子

二位　新緑や双子の眠る乳母車　澤田　敏江

三位　遠足の幾つ寝ればと指折る子　中田　広美

「峡谷」

◇峡谷創刊二十周年記念大会（通信句会）

天位　かくしゃくと卒寿の歩幅風光る　中　静子

地位　雪解川一万尺を駆け下る　吉田　憲子

人位　若葉風くろワンきっぷ宇奈月へ　池﨑　悦子

佳作　はてしなく緑なす山濃く淡く　木下　瞳

老いしこと友と語りて柏餅　鹿熊　紀子

麦秋や黄を泳ぎたし鳥のごと　山本　正子

「玄鳥」

◇俳誌「玄鳥」三四四号～三四七号発行

◇定例句会・通信句会　毎月第一日曜日開催

◇吟行会　九月三日、高岡市八丁道近辺にて吟行

尼寺の小さき釣鐘大西日　松谷眞佐子

アスファルトの「止まれ」が伸びる大西日　跡治　順子

広島忌玉虫色の羅針盤　高島　詩香

鑑真忌波に夕陽の水平線　河合　彰

「高志」

◇俳誌「高志」五一七号～五二二号発行

◇高志四十三周年記念俳句大会

令和年五年六月十八日　氷見市芸術文化館

参加者二十八名　不在投句者十四名

一年生後ろの正面いつも母　坂田　直彦

時刻表の数字は疎ら夏燕　土井　雪子

折鶴に息を吹き込む広島忌　大野　康子

「草樹」「とやま草樹句会」

◇会報二〇三号～二〇七号

月ごとの例会を雄峰高校県民カレッジ富山地区センターで開いた。

箒草風を均していたりけり　森川　敬三

猫が来て子が来て皆の夕端居　亀谷　正恵

妻の留守付箋頼りの冷蔵庫　兒堂　衣代

地蔵会の莫蓙に幼なの正座かな　飯干ゆかり

球場のざらつく座席油照　吉田　久夫

「岳」

◇毎月第一、第二水曜日に句会を開く。

◇十一月一日、朝日町翡翠海岸、東福寺野自然公園にて吟行会催行。

秋潮をたどる小舟や奥は能登

秋夕焼鐘の音ゆるり海へ落つ

「みのり」

◇定例句会　月一回の例会

参加十七名　場所は立山町元気交流ステーション

◇みのり俳句会だより№三十二号（白井重之代表）

◇俳誌「連峰」十七号発行

◇令和五年度立山町町民文化祭に参加。

◇吟行句会　十一月十六日十時　滑川市　宿場回廊

◇町民文化祭出展作品より

天の川山国住いに酒飲み多し　白井　重之

野仏の顔なき顔に秋の風　谷口　智子

秋思ふと洗濯物を畳むとき　高井由紀子

「森」

◇俳句誌「森」は十月号で通巻一五七号になった。

◇十一月三日に高志の国文学館で第3回高志の国詩歌賞受賞の俳人堀田季何さんの特別講演会があり、そのトークセッションに森野主宰が参加。

◇主宰の森野稔が伝統ある「小林一茶忌全国俳句大会」で募集句の選者に指名された。大会は十一月十九日の一茶の命日に長野県信濃町で開催。

◇四年ぶりとなる年次俳句大会は、富山県東部を会場にして行われた。吟行地は黒部市生地の清水巡り、くろべ牧場「まきばの風」と魚津市の東山円筒分水槽だった。宿泊は魚津市の金太郎温泉、村椿魚津市長が飛び入りで参加、魚津市の紹介などをしていたたぎ、全国から訪れた会員には刺激的な大会に映ったようだった。

海底を抜ければ地上鳥渡る　後藤みち子

名水橋魚影の走る秋の川　古澤　桃

霧払ふやうなる仕草山羊の髭　森野　稔

「お詫び」

会報六〇号での「みのり」の結社だよりが記載されなかったことを深くお詫びいたします。